
Almighty Wizard ~ 全知全能の魔法使い ~

黒蝶 白夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Almighty Wizard 全知全能の魔法使い

【Nコード】

N8616X

【作者名】

黒蝶 白夜

【あらすじ】

親友と幼馴染みと妹に巻き込まれて、俺まで異世界に召喚されてしまった。

そこでは、魔法が普通に使われており、科学は使われていなかった。そこで、勇者として、魔王を倒してくれと言われたが、俺は………

……………

主人公最強になります。

プロローグ

俺は今、幼馴染みと妹と親友と帰っている。でも、俺は独りである
いている。

どうしてだ、と思っっているだろう？それはな、みんな親友の隣を歩
いているからだ。

因みに俺はこいつらの後ろを歩いている。目の前でそんなのを見せ
付けられると……………

悲しくなってくる。

突然だが、ここで紹介をしよう。

俺こと、齋条うさじょう 黒斗くろとで、

見た目は、自分で下の中ぐらいで、成績は、上の中ぐらい。特技は、
家事全般だ。

次に、俺の親友、北上きたがへ 雷火らいかで見た目は上の上、成績は上の上。こ
いつは、俺が中学2年生のとき、友達になった。高校では、ファン
クラブがあるほどのカッコよくて、みんなから、頼られるほど優し
い。

次は、俺の幼馴染みの佐薙さなな 穂香ほのかで見た目は、上の上成績も雷火と
同じで上の上。こいつは、俺が幼稚園の頃からの付き合いだ。毎度
毎度、思うんだが、こいつは何故俺と一緒に居てくれたんだ？と思
うがこいつも優しいからだと納得している。そして、こいつもファ
ンクラブがあるほどの奴だ。

因みにこいつの家は、剣道の道場があり、そこで、剣道を教えてい
る。こいつもやっているため滅茶苦茶強い。

次は、俺の妹、佐々木ささき 紬つむぎで、見た目は上の上、成績も上の上。こ
いつとは、妹だが、今は、赤の他人だ。それは、両親が離婚して、
俺は、親父の方。妹が、母親の方に。だから、俺と妹は赤の他人な
のだ。

とりあえず紹介は済んだが、俺らは今、暴力団のアジトに居た。

こいつらは、正義感が異常なほどあり、うちの学校の生徒が何かやられてやり返しに来たんだと。

そしてこいつらは、後始末はしていかない。だから、俺がしている。今日もした。

死ぬほど疲れるんだよ、後始末。

そして、今こいつらと帰っている。

数分間俺は黙々と歩いたとき、自分の足元に魔方陣を見つけた。この感じからして、こいつらを呼んでいると察し、もう少し止まって巻き込まれない程度の距離で歩き始めた。

こいつらは俺が少し離れたのを気付いていないから、後はこいつらがやってくれるだろうと思ったが、3人中2人が気づいて近寄ってきた。それは、妹と幼馴染みだった。2人は俺に

「どうしたの、黒斗？」

「どうしたのよ、本当に？」

疑問に思われては困るから、

「大丈夫だよ。少し、疲れただけだから。」

嘘をついてしまったが大丈夫だろうか？

「そう？辛かったら言ってね。」

「兄貴に、倒れてもらっちゃ此方が困るんだから、早めに言ってね。」

「そう思ったが、杞憂だった。」

「ありがとう、2人とも。」

と微笑みながら言ったが、2人とも怒ってしまったのか、顔を赤くしてそっぽを向いた。

その瞬間、足元の魔方陣が光だした。

駄目だったか……………そう思いながら、光が俺と3人を包み込んだ。

目を開けると、そこは何処かの部屋だった。

後ろに気配を感じて、振り向くと、そこには、巫女の服を着た少女と3人の女性騎士が居た。

何か驚いていたが俺は情報がほしいから、巫女の少女に話しかけた。

「……………えっと、ここは何処かな？」

「……………ここは、シューメルトと言う世界で、貴方方を勇者として召喚したのですが。」

「そうか、それで何故か4人居たので驚いていたのか。」

「…は、はい。そうです。」

「それで、俺たちはこのあとどうすればいいの？」

「それは、まず、王様に会ってもらいます。」

「解った。さつさと案内してくれ。」

と言ったら、3人の女性騎士が動き出そうとしたが、巫女の少女に止められた。

「それでは、行きましようか。」

そう言つて、歩き出したので俺たちは付いていった。

因みに、3人はとっくに起きていました。俺が話しているうちに起きたのだ。

第1話（前書き）

久しぶりに書きました。
それではどうぞ。

第1話

突然だが、俺は今、王様の前にいる。

王様に今どういう状況なのかを聞いている最中。俺は聞いていませんがね。と言うか長いんだよ、話……。だって、軽く30分も話すんだよ！その間ずーっと立っているんだよ！！

と少々壊れておりました、斎条 黒斗です。

ちなみに王様の話はさつき終わりました。話をまとめると、魔王が魔族をまとめて、自分達の国を攻めて来て、しかも、魔王軍一千万に対して、こちらは百万人。圧倒的な戦力の差である。そして後は、わかる通り勇者を召喚しようと言った様になり、そして、召喚されたのが俺達と。

流し流し聞いていた俺は、とてもキレている。それはそうだろう。

コイツらの勝手でアイツらの人生が変わってしまうのだから。

そして、俺自身にもキレていた。あの時魔方阵を壊していればこんなことにはならなかった筈なのに……！！

俺が自分の過ちを悔やんでいると、雷火は王様に向かって

「分かりました、王様！！この世界には成り行きで来てしまったけど、僕は苦しんでいる人々をこの手で救いたいです！！まだ弱いかもしれませんが、きっと魔王を倒して見せます！！」

更に穂香までも

「私も雷火と同じ気持ちです！！魔王は許せません！！」

「私は魔王とかどうでも良いのよ！！」

おっ、戦わないでくれるのか、紬よ。

「だけど、やればなしでは私の気がすまないわ。だから、手伝ってあげるわよ！！」

我が妹よ。それは無いんじゃないか？
仕方無いので俺もノリで

「じゃあ、俺も戦おうかな？」

と疑問系で答えておく。その方が後で楽だから！！
そして、みんな（？）が魔王討伐を誓ったら、王様が

「それでは、勇者様達には覚醒してもらうために勇者の間に行ってもらいます。

それでは、娘のフィーナに着いて行って下さい。」

そう言って巫女の格好をして俺達を召喚した少女が俺達の前に出てきて

「それでは、私に付いて来て下さいね。」

そう言って歩き出した。俺達はそれに付いていった。

それから5分間豪華な廊下を歩いていたらフィーナが突然ある1つの部屋の前で立ち止まり

「こちらが勇者の間です。私達は中に入ることが出来ませんの、皆さんだけで入って頂きます。

この部屋の中には色々な武器や防具が有りますので自由に選んで下さいね。」

その事を聞いて俺はフィーナに

「それじゃあ全部とはいかないけど結構持っていかれるんじゃないのか？」

「いいえ、そんな事は無いです。この中にある武器や防具達は使う人を選ぶらしいですよ。だから、そんな事を有り得ないですよ。」

それを聞いた俺は礼を言おうとしたが、雷火が先に言ってしまった。

「教えて頂きありがとうございます、フィーナ様。」

それに対して、王女様は顔を赤くしてもじもじし始めた。

俺は、落としたな、と思ってた。妹達はどう思っているのかなと思いい見てみたが、平然としていた。

俺の視線に気がついた妹と幼馴染みは怒ったのか顔を赤くして顔を逸らした。

そんなこんなで、俺達は勇者の間へと入っていった。

「なんだよ、この部屋……………！？」

部屋に入った瞬間に俺はこんな事を言った。

そこに有ったのは武器が山積みになって、その回りに防具がある。その量が尋常じゃない。その山があと十個以上あるのだ。とりあえず、俺達は

「……………選ぶのか。」

「……………そ、そうだね。」

そう言っ、選ぶことにした。

選ぶことにして10分が経った。でもまだ俺は決まっていな。

「どれにするかな？……………ん、これなんかいいんじゃないか？」

そう言っ俺は腕輪を取った。

すると、目の前が真っ暗になり俺は目を閉じた。

次、目を開けるとそこは夜の草原だった。

「……………自分自身の心理かよ……………」

「貴方は驚かないのですか？」

と突然後ろから声が聞こえて

「俺は少し特殊なんでね。」

そう言いながら振り返った。そこに居たのは、15歳ぐらいの少女だった。俺は

「驚いたな。君は何者なんだ？」

その言葉に少女は泣き出しそんな顔をした。そんな顔を見た俺は

「嫌なら言わなくて良いよ。どんな人でも俺は構わないし、君が言えるようになったら教えても欲しい。」

少女はその言葉を聞いた瞬間目に涙を溜めた。俺はそれに対して

「泣きたければ泣けば良い。俺が受け止めるから、いくらでも泣けば良いよ。君が背負ってきたモノを俺にも背負わせてくれないかな？」

俺は少女を抱き締めながら言った。やはり、泣かれるのは嫌だから。少女は俺が抱き締めてからすぐに泣いた。それから、5分後、少女は泣き止んだ。そして、自分の過去を語った。

「私の属性は闇なんです。だから、私を選んだ人達はいつも殺されるんです！！」

闇は、魔族の象徴だから。そんな理由で殺されるんです！！だから、私はこんなの嫌なんです！！私はなにも出来ないから……………！！使ってくれた人がいつも殺されるのを見てることしか出来ないから……………！！」

俺はそれに

「なら俺は死なないよ。」

「嘘です!!」

「嘘じゃないよ。」

「なら見せてくださいよ!!死なない事を!!私が安心できると言うことを!!」

「分かったよ。」

「……………見てるんだろ、お前ら。」

俺は誰もいないところに声をかけた。すると

「貴方はやっぱりお人好しですね。でもそんなところも私は好きですから」

と髪の色が紅色の美女が言って、

「私も好きですから、そんな黒斗を」

と髪の色が蒼色の美女が言って

「増やさないでよ、黒斗。心配しちゃうから」

と髪の色が碧色の美女が言って

「本当よ、黒斗」

と髪の色が茶色の美女が言って

「……………うん……………」

と髪の毛が黄色の美女が言って

「大好き♪」

と髪の毛が白色の美女が言って

「……………ダメ……………抜け駆けは……………」

と髪の毛が黒色の美女が言って

「本当よ、アンタは。」

と髪の毛が銀色の美女が言って

「やめなさいよ、アンタ達。」

と髪の毛が金色の美女が言って

「本当、だよ。喧嘩、は、ダメ。」

と髪の毛が漆黒の美女が言って

「黒斗」

と髪の毛が色々混ざった美女が言って

「じっくん」

と髪の毛が灰色の美女が言って

「黙りなさい。」

と髪の毛が白黒の美女が言って

「アナタ達ね……………」

と髪の毛が純白の白色の美女が言った。

「…………お前ら、自己紹介ぐらい言えよ……………」

と俺が言った。そうしたら、まずは、紅色の美女が

「初めまして。私は、アストリヤの火の神をしています、ヒリヤと申します。」

次は、蒼色の美女が

「初めまして、私も同じ所で水の神をしています、ミズキと言います。」

次は、碧色の美女が

「初めまして。私も右に同じで、私は風の神をしています、フウカと言います。」

次は、黄色の美女が

「……………私は、雷の神でライナ。ヨロシク。」

次は、茶色の美女が

「ウチは土の神をしてる、ツチカ。ヨロシクね。」

次は、白色の美女が

「私は、勇者の神のソフィアと申します。ヨロシクお願いしますね。」

次は、黒色の美女が

「……………私は……………魔王の神……………クロヒ……………ヨロシク……………」

次は、銀色の美女が

「私は、月の神のルミナと申します。宜しくお願いしますね。」

次は、金色の美女が

「私は、光の神、ヒカルと言います。」

次は、漆黒の美女が

「私は、闇の、神、ヤミカ。」

次は、色々な色が混ざった美女が

「私は、混沌の神、カオス。」

次は、灰色の美女が

「私は、時間と空間の神、クロス。」

次は、白黒色の美女が

「ボクは、邪神のアストール。」

最後に純白の美女が

「私は、創造と破壊の神、オーディーナ」

自己紹介が終わり、俺は少女に

「これが俺が死なない理由だ!!」

一度言葉を切って、

「それでも信じられないか？俺は絶対に死なん!!」

俺は最後に微笑んだ、優しく。すると、少女は

「信じますっ!!私は貴方を!!」

「そうか、よかった。」

少女は俺に抱きついて、キスをしてきた。
数秒経って、少女は離れた。

「これで契約は終わりました。御主人様の力を覚醒させましたので、確認して下さい。」

「分かったよ。それと、御主人様って？」

俺が聞くと、少女は

「私の御主人様だからです。それと、名前をつけて頂けませんか？」

「そうだな……………」

コイツは悲しんでいたのだから、二度と悲しまないようにと意味をした方が良くないかな？

それとも……………ん、良いのが思い付いたぞ！！

コイツの名前は、

「決めた。お前の名前は、アカリだ！！
闇を優しく包む明かりとなるようにと。」

それを聞いた、アカリは

「は、はい。御主人様♪」

と言った。喜んでくれたなと思いながら、俺は、

「俺を元のところに戻してくれないか？」

「分かりました。」

「ありがとう、それじゃあ後でなみんな!!」

そう言っ
て俺は目を閉じた。

第1話（後書き）

面白いと思って頂けたのなら嬉しいです。
それでは、また。

第2話

細side

私は今、彼氏（偽）の雷火さんと兄さん、穂香さんと歩いている。何故偽だと言うのかは、私が兄さんに心配させるために。だけど、兄さんは心配しなかった。それはそうだ。相手は親友なのだから。私は兄さんに心配させるために頑張った。色々な危ないところへと行ったりと。だけど、全部ダメだった。悲しかった。

ここで少し昔話をしよう。ある兄弟の。

ある日、一人の兄と、一人の妹が居た。その兄弟はとても仲が良かった。兄は妹の事をいつも守っていたし、妹はその兄の守ってくれる背中が好きだった。友達は居なかったが、妹は兄と遊ぶのが好きだった。ある日、兄が一人の少女と知り合った。妹は兄だけでは、出来なかった遊びが出来るようになり、とても喜んだ。だけど、幸せは長くは続かなかった。

二人の両親が離婚することになってしまったからだ。この事を知っていたのは、兄だけで妹は知らなかった。そして両親はどちらか一人連れていくことになった。母親は妹を、父親は兄の事を。そして、最後の日に兄は少女に告白した。少女に対して自分が居なくなることを告げずに。だけど結果はダメだった。兄はひどく傷付き、妹はその姿を見て、自分の胸が締め付けられるような痛みを感じただけど、考えることをしなかった。いつも一緒に居られると思っていたから。次の日妹は兄と離れ離れになった。泣いたけど、ダメだった。その時漸く、気が付いた。兄の事を好きになっていたことに。そして離れ離れになって数年間、妹は自分の事を磨いた。いつか、会った時に自分の事を好きになってもらうために。そして高校一年になった時、再会した。だけど、兄は妹の事を他人事のように扱っていた。その事に対して妹は何度も何度も泣いた。それでも、アタックし続けた。好きだから。兄さんの事が。

そして、父さんが死んで兄さんの事を引き取ることになった。それでも、兄さんは自分達の事を他人事のように接していた。そして歩いていると、私達は目の前が光、目を瞑った。そして、目を開けると、そこには私達が知らないような世界だった。

この世界には、魔王がいて、魔法があつた。そして、私達に魔王を倒せと王様は言った。最初は嫌だったけど、雷火さんがアイコンタクトで私と穂香さんに『魔王を倒したら、黒斗が振り向いてくれるんじゃない？』と伝えてきて穂香さんは即答した。私は迷ったけど答えた。

そして、私達は武器を選んだ。私は、槍を、双槍のギルティードと

エルフェイトを選んだ。そして、覚醒させてもらい、私はこの世界の事を聞いた。

この世界は一夫多妻制で兄弟同士でも結婚が出来ることを知り、私は決心した。絶対に兄さんと結婚することを！！
そう思いながら、目を閉じた。

穂香 side

私は、黒斗の事を愛している。昔、私は黒斗に告白された。その時の私は、ツンデレと言われていた。だから、断るような事を言った。次の日に私は少し素直になりやっぱり良いことを伝えようとした。だけど出来なかった。紬ちゃんが泣いていて、どうしてだろうと思いついた。黒斗が居なくなることを聞いて、最初は嘘だと思った。だけど、現実だった。その時になってようやく、気が付いた。黒斗が告白してきた事の意味を。泣いて、泣いて、泣きまくった。そして黒斗と再び会うときまで、私は世界が色褪せていた。黒斗と会ってから世界が華やかになっていた。そして、黒斗に話し掛けて気が付いた。私の事を他人のように接していることに。私は黒斗の事を愛しているのに、あの時のせいで黒斗とは親しくなくなった。だけど、絶対に振り向かせてあげるから、黒斗！！

第3話

目を開けた先に居たのは、目を閉じて何やら俺に近付いている穂香だった。穂香は目を閉じていたので、俺が目を開けたことに気付かずに迫ってくる。

とりあえず、俺がすることは避けることだ。

何故避けるのかは、アイツには好きな人がいて、俺と居るところを見られたら、ヤバイからだ！つまり、雷火の事だ！よく雷火と喋っているのを見かけるからだ。

そして、俺が避けたことにより穂香は転んでしまった。俺は慌てて支えた。だって、転ぶとは思わなかったから。その間、穂香は転びそうになって目を開けて、また目を瞑った。怖くて反射的に瞑ったのだろう。

穂香 side

私は今、私の愛しい想い人にキスをしようとしている。普段隙を見せない黒斗が目を瞑って、しかも無防備なのだから！！

私はチャンスだと思い、目を瞑って黒斗に迫った。

あと少しでキスができる、その事が頭の中をぐるぐる繰り返し駆け巡った。あと少しでキスができるところで、私は転びそうになった。何故だろうと思い目を開けたら床が迫っていた。怖くて目を瞑った。

ただどれくらい待っても衝撃がこなかった。何故だろうと思い目を開けて目線の先に居たのはなんと、黒斗だった！！

ここで黒斗の容姿の説明をしよう。

黒斗は普段から自分の容姿を下の中ぐらいたと思っているらしいが、本当は上の上以上。

そして、私は黒斗に

「あ、ありがとう／＼／＼……………やっぱりカッコいい。」

と言った。それに対して黒斗はもう仕分けなさそうな顔をして

「すまん、避けて。転びそうになるなんて思ってたんだ。」

と謝ってきた。私が悪いのに、自分が悪いって謝るなんて優しすぎるよ、黒斗……………。

私は黒斗に

「私が悪かったの。黒斗が謝ることなんてないんだよ？」

そう言ったら、黒斗は

「俺が避けなかったら転びそうになることはなかったから。」

その言葉を聞いて私は、慌てて話を変えた。このままだとズー……と続きそうだったから。

「黒斗は何を選んだの？私はこの二つの剣。」

そう言っただけで私は二つの剣、ラハルとアスヤを見せる。黒斗は私の剣を見て、

「いい剣を手に入れたな。」

そう言っただけで私の頭を撫でた。私は顔を真っ赤にしていたと思う。それぐらい恥ずかしかったけど、それ以上に嬉しかったからだ。

そんな幸せの時間は長くは続かなかった。それは黒斗が手を離して

しまったからだ。それに対して私は

「あっ……………」

と言ってしまった。それに対して黒斗は

「今度は、雷火にやつてもらえな？」

とお前が好きな人は分かってる、といった顔をして私に言った。
私は頬を膨らませて、黒斗に聞こえないぐらいの声で、

「……………私がやって欲しいのは黒斗だけなのに。何で勘違いするのかな？私には魅力がないのかな？やっぱり、私じゃあ黒斗に釣り合わないのかな？」

ネガティブな思考に走っていたら、黒斗は

「俺はずっとお前を守り続けるよ。」

「えっ！！どういう事！？」

私が問うと黒斗は

「そのまま意味なんだが。でも、お前が好きな人と一緒になったら俺じゃないソイツに守ってもらえな？」

私はそれを聞いて、あることを思い付いた。

黒斗は今、好きな人が出来たらソイツに守ってもらえと。ならずーと守ってもらえるのじゃないのかと。だから私は黒斗に

「私を守ってね、黒斗」

「分かりましたよ、お姫様。」

そう言っ、私の前に片膝をついて騎士が忠誠を誓うように言
った。

私はそれを見て

「……………ずーっとして守ってね、黒斗。私が愛しているのは、黒斗
だけなんだからね」

小さい声で言った。

第4話

あの穂香を守る宣言をしてから数日が経った。あのあとすぐ紬と雷火が自分の武器を見つけた。紬は二双の槍と軽めの防具、雷火はまさに勇者と言った感じの防具、剣、盾だった。

その日は、武器を選んだだけで終わった。

次の日は、それぞれの武器を使って、騎士達と模擬戦をしただけで終わった。

そして三日目、今現在。俺は、今騎士の中でトップクラスの實力を持つ女と相對している。それも相手から物凄く睨まれている。

俺が何をしたーーーーっ!!

俺は空を仰ぎながら、そんな悲鳴を上げていた。そもそも、何故こうなったのだろうか？少し過去を振り返ってみるか。

~~~~~回想~~~~~

「（キスしても大丈夫だね、穂香さん？）」

何だか誰かの声が聞こえてくるな~~~~。

俺はそんなことを考えていた。体は少しずつ起き出しながら、意識はまだ寝ていた。だから、誰が何の話をしているのか、どんな内容なのか分からなかった。このときしっかりと起きていればあんなことには……………っ。

「（大丈夫ですよ、紬ちゃん。それより、あの事は本当なんですよね？）」

「（本当ですよ、この世界は一夫多妻制が認められています。）」

「（安心しました。これで心置きなくやれますね♪それでは、誰が先にキスをしますか？）」「

「（ジャンケンで決めますか？それとも一緒にしますか？私は兄さんと出来ればいいんですけどね♪でもやっぱり兄さんの初めてを奪いたい。）」「

「（そうですね。やっぱり一緒にキスをしますか。その方が私にとっても細ちゃんにとってもいいみたいです。）」「

「（そうですね。兄さんとキスできるなんて夢みたい。）」「

「（それでは）」「

俺は何となく目を開けた。本当に何となく。開けて最初に写ったのは穂香と紬が目を瞑ってこちらに近づいて何かをしようとしている姿だった。だから俺がすることは……………

「何をやるうとしているんだ、お前らは？」

「「えっ！！」」「

「二人揃って、えっ、とはなんだよ。だから何をしようとしていたんだよ？」

「あ、兄さんを起こそうとお思ったただけですよ。ねえ、穂香さん？」

「そうですよ！！別に深い意味はないんです！！！」

「そうか。ありがとな、二人とも。」

そう言つて俺は二人の頭を撫でた。俺の事を起こそうとしてくれたことに感謝しての事だ。だってそうだろう？理由はともあれ起こしに来てくれたのだから。撫でていると二人とも風邪を引いたかのように、顔を赤くした。そして二人は

「ああありがたく思つてよね！！」

「たたたたまたまです。気分が向いたから起こしに来ただけです！！」

上から、紬、穂香の順だ。俺はそれを聞いて

「そうか……………でもありがとな。俺みたいな奴を起こすのは嫌なのに起こしてくれて。でも、もう起こしに来なくていいよ。二人にも好きな人がいるだろう？ソイツに勘違いされるかもしれないからな。それに二人は美人だから、俺みたいな不細工は傍に居ちゃいけないんだと思うんだ。」

俺は二人に対して、自分の本音を言つた。紛れもない本音だ。

俺のその言葉に対して二人は俯き出した。俺は二人に何かあつたのかと思ひ、二人に、どうしたんだ？と言おうとしたが言えなかつた。何故なら、二人に押し倒されたからだ。幸い、後ろはベットだったので怪我はなかつた。怪我は無かつたけど危ないので、俺は二人を怒ろうとしたが

「そんなに自分を無下にしないでください……………グスつ……………」

泣きながらそんなことを言われれば何も言えないじゃないか。だから俺は

「……………ごめんな。」

そう言って二人を抱き締めた。泣かせてしまったから落ち着かせるために。

とそこで、扉が開いて

「遅いぞ、穂香、紬！！これから、私と戦う……………話……………だろ？」

俺は突然入ってきたそいつを見て嫌な汗がたらたらと流れるのを感じた。見たことがない奴だが、今の状態を見られているのはヤバイ！！勘違いしてしまう！！

「貴様っ！！何をやっている！！二人をどうするきだ！！」

ほら、こんな風に。ちなみに、今俺たちの状態は、俺に抱きついて泣いている二人、俺は抱き締めている。しかも不細工の俺が。だから、俺は必死に弁解した。

「ち、違う！！と言うか誰だお前！？何でノックをしないんだよ！？何でここにいるんだよ！？」

「な、何が違うと言うんだ！！それに私は、王族騎士団騎士長フィルナ・A・ストラートと言う者だ！！ここに来た理由は、その二人と決闘するためだ！！そして扉を開けたらこのような状態になっているとは！！は、破廉恥な！！今からお前を成敗してやる！！決闘だ！！」

「……………どうせ、何を言っても決闘されるんだろ。分かったよ、決闘をすればいいんだろ？それで何時殺るんだ？」

俺は今イラついている。勝手に勘違いして、決闘を申し込んだ女に對して。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8616x/>

---

Almighty Wizard ~ 全知全能の魔法使い ~

2011年11月21日12時30分発行